

北方領土ビザなし交流紀行

鍛冶雅和

本年度も北方領土交流訪問事業、所謂ビザなし渡航に自衛隊家族会会員から2名、本部からは鍛冶運営委員、栃木県家族会からの推挙により賛助会員の栃木県県会議員、横松氏が参加しました。

この事業は、戦後、ソ連に不法に占拠された我が国固有の領土である北方四島に対して、日露両国に平和条約が締結され北方四島が返還されるまでの間、日本国民と北方四島在住のロシア人との相互理解の増進を図り問題解決に寄与することを目的として1992年から実施されています。訪問団は、北方領土の元居住者及びその子孫、そして北方領土返還要求運動に寄与している関係者で編成されており、自衛隊家族会は常日頃の熱誠なる署名活動の実績が認められ、また家族会としてもその活動の意義を家族会として確認する為に例年参加しています。

本年度第1回目となる北方領土交流等専用船舶「えとぴりか」を使用した訪問団は、7月27日（金）16:30に根室市長、元島民の方々等の見送りの中、根室港を出港しました。団員は、確認試験も有る厳しい事前勉強会で北方四島等に関する知識を詰め込まれ、出港後の船内でも島内で予定される実施プログラムに対して、ロシア語のレッスンを含め準備の余念が有りませんでした。比較的穏やかな海上模様にも関わらず船酔いで中々ベッドから出られない者も散見されました。



「えとぴりか」に乗船

翌28日（土）最初の訪問の島である国後島に上陸、現地の視察や住民との交流、古釜布（フルカマップ）墓地の墓参等のプログラムをこなし帰船、その間、安倍一歩一歩で確認された「新しいアプローチ」（日露経済共同事業）のロシア側の肯定的な感触を掴むと共に、一方で、ロシア側の既成事実の積み重ねとなる「クリル発展計画」実情を確認し、返還への道程が容易でないことを再認識させられました。



はしけで「えとぴりか」から国後島に移乗

同夕刻に国後島沖を出港、国後水道を夜間に航過し択捉島沖に入港、早朝から上陸し、住民交流会、家庭訪問（ホームビジット）、そして今回のメインプログラムの一つである日本人墓地の修復作業等をこなし帰船、翌日はダート・トラックでの島内辺境地視察、水産加工工場、こども園等見学・視察、現地での交流会と慌ただしいプログラムで、島内での二日のプログラムは終了しました。



択捉島文化交流プログラム



墓地修復に汗を流す団員



辺境地研修で使用したダート・トラック



択捉島の街並み

訪問期間中は、北方領土とは思えない32℃の気温と抜ける様な青空の中、島の様々な峰々を遠望し「戦前多くの日本人がこの風景を見たのかな。」という感傷に浸る一時も有りました。



択捉島、散布山を背景にロシア人住宅

31日(火)12時には根室港に寄港し、全ての事業は終了しましたが、自身としてまた日本人の一人として占拠されている我が国の国土を踏みしめた感慨と帰宅後直ぐにニュースで知ったロシア軍戦闘機の択捉島配備が象徴する様な、北方四島返還及びこの事業の厳しさを再認識させられた期間でありました。そして、この非正常な状態を解消する為の運動を自衛隊家族会として継続することの重要性を再認識させられたのでした。

P.S.:勿論、島には言うておきました。“ダスヴィダーニャ (またね、さようなら)”